θάνατος

サナトス

知っておきたいキリスト教のことば （86）

死 し

様々な宗教において、「死」をどのように捉えるかということは、とても大事なことだといえます。

創世記 2～3 章には、アダムの罪の結果として死が入り込んできたと書かれています。アダムの罪とは、神さまの命令に背き、善悪の木の実をエバと共に食べたことです。そのことによって、人はエデンの園を追放され、地を耕して生きるようになったのです。

死はすべての被造物におとずれる、運命といえます。どんな人であっても死を免れることはできないのです。

それでは「死」はすべての終わりなのでしょうか。パウロは彼の手紙の中で、このように書いています。

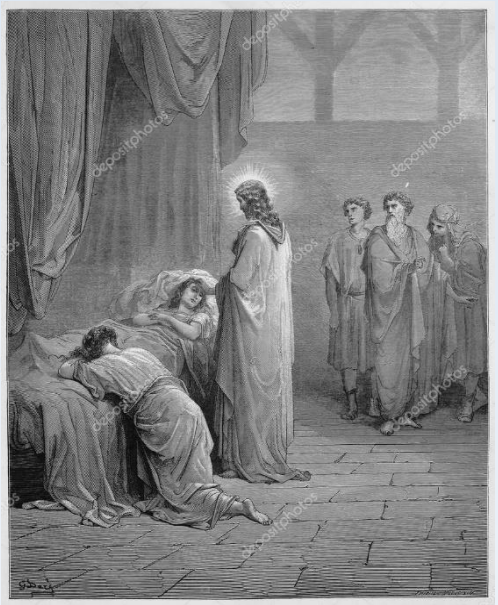
わたしたちはキリストにおける信仰によって罪に死に、死と罪の法則から解放され、死は力なく、死は最終的にはキリストによって滅ぼされる。（ローマおよびコリントの信徒への手紙より）

つまりキリスト教では、死への恐怖はもはや過去のものとなっていると考えているのです。わたしたちはイエス様によって約束された復活という希望を抱いているのです。

とは言っても、やはり死は悲しいものです。愛する人の死によって日常生活は一変し、涙の中からなかなか抜け出すことができないのが現実です。

しかし、それでもわたしたちは、いつかまた神さまのみ許で会えることを信じ、天に召された方を送り出します。わたしたちの教会ではお葬式のときに、棺覆いや聖卓などに白い布をかけます。降誕日(クリスマス)や復活日(イースター)、結婚式と同じように、お葬式でも白を用いるのです。そして「ハレルヤ！」と、涙を流しながらも神の国への凱旋をお祝いするのです。

次回は「塩」です。お楽しみに。



「生き返った娘」
ギュスターヴ・ドレ
（1832～1883 年）

キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。

（ローマの信徒への手紙 8 章 2 節）